

ソビエトのピオネールキャンプに関する研究

里見悦郎
(東海大学大学院)

高橋和敏
(東海大学)

ソビエトのレクリエーション・活動・組織

1. まえがき

ソビエトにおける青少年の課外活動を考える時、コムソモールを頂点に整然と組織されたピオネール、アクチャプリヤータの児童、青少年を対象とした課外活動組織を無視することはできない。特に10歳から15歳までの身体的、精神的成長にとつて重要な年齢にある少年少女を対象としたピオネール組織はソビエトの教育制度とその思想の上でも、最も特出した組織と見ることができよう。

本研究の目的はソビエトの少年少女の課外活動組織として知られるピオネール組織が創設後わずか60年という短い期間に急速に成長した要因について考察を加えるとともに、ピオネール組織の活動の中でも最も大きな意義を持つとされるピオネールキャンプについて、この西欧諸国と異なつたキャンプの形態がソビエトに発達したその要因と必然性について、ピオネール組織の創設の歴史的背景とピオネール組織の諸活動を支える社会的背景について考察を加え、ソビエトにおけるピオネールキャンプの意義を明らかにしていくことにある。

2. 考察

ソビエトの少年少女の課外活動組織ピオネールは、現在10歳から15歳までのソビエトの児童のほとんどすべてが所属する巨大な組織である。欧米諸国を見渡しても、一国の児童のほとんどすべてが所属している少年少女の組織はこのソビエトのピオネール組織を模範として作られた東欧等の社会主義国の組織を除いて、ほとんど例がない。

このソビエトのピオネール組織の活動はソビエト共産党の強力な保護と労働組合の援助によつて成立している。次に、ピオネール組織創設の歴史的背景を通して、ソビエトがピオネール組織を創設しなくてはならなかつた必然性とピオネール組織の急成長の要因について考察する。

1) ピオネール組織創設の歴史的背景

1917年10月25日、ロシア革命の結果、レーニンの指導の下に共産主義を目指すソビエト社会主義共和国連邦が誕生した。

革命直前のロシアは当時の西欧諸国の中でも最も社会的にも、政治的にも、さまざまな面で

遅れた国家であつた。革命前のロシアは全国の賃金労働者1000万人のうち、250万人が婦人と児童で占められ、5～6歳の児童が17時間前後の労働を強制されていた。このような児童は全体の90パーセントにもものぼつた。教育を受けることができたのは、わずか10パーセントあまりの子どもだけであつた。その結果、ロシア国民の73パーセントが文盲であつた。当時のヨーロッパ諸国の文盲率はフランス15パーセント、イギリス8パーセント、ドイツ7パーセント、それと比べるとロシアの文盲率はきわめて高かつた。さらに、幼児の死亡率は、1900年代25.2パーセント、1910年27.1パーセントと高率であつた。この背景には、国民の多くが十分な教育を受ける機会も与えられなかつたために、最低限の保健衛生の知識をも持つことができず、そのため、多くの子どもたちがチフスなどの伝染病で生後間もなく、死んでいつたのをロシア人は見てきたのである。今日、ロシア人が子どもたちに寄せる深い愛情のその根源に、革命前なら教育を受けることができなかったがために、彼らが体験してきた悲劇を再び繰返したくはないという固い決意がロシア人の中に生きつづけているためではないかと思われる。さらに、このロシア民衆の体験がロシア革命後、次々に出された教育政策に反映されることになつた。

1917年10月25日のロシア革命の後、ロシア国民の教育と保健衛生の知識の普及はソビエト政権の最重要課題の1つとなつた。

1919年3月、ロシア共産党第8回大会はソビエトの教育制度の基本的原則として、無償義務制の学校教育の実施が決定された。さらに、レーニンはこの年、赤の広場で青年と子どもたちを集め、「子どもの組織は共産主義者を教育する最適の方法である」(1)と演説した。同年12月26日、レーニンは文盲根絶に関する布告に署名、8歳から50歳までのソビエト国民はロシア語か民族語で読み書きができるようになることが義務づけられた。

1922年5月18日、ロシア共和国コムソモール第2回会議はレーニンの演説に答え、子どもの共産主義運動の単一組織「スパルターク記念ピオネール組織」の創設を正式に決定した。

この年の末にはピオネール隊員は約4千人となり、さらにモスクワのハモブニキ区に初めてピオネールの家が創設された。

1920年代の初期に次々に打出した理想主義的な教育政策（国家はすべての生徒に、食物、衣服、学用品を無料で提供する等）は第1次世界大戦によつて荒廃したソビエトにとつて、その実施は不可能であつた。

1923年8月、人民委員会は初等義務教育を全国に導入する決定を行っていたが、1921年には小学校の数は7万6千から8万2千校、生徒数は600万から680万人と推定されていたが、1922年4月には学校数6万8千に落ち、同年12月には5万5千校に、1923年10月には4万9千校、生徒数は370万人へと減少していた。

誕生したばかりのソビエトは西欧諸国の干渉を受け、さらに国内の外国資本は国外へ撤去され、資本は不足し、農産物の生産も減少するなど、ソビエトは国家存亡の危機にあつた。このような状況下においては、ロシア国民がソビエト政権に期待していた教育政策も後退せざるおえなかつた。1923年初め、人民委員会は教育のすべての段階に授教料を導入する決定を行った。この結果、共産主義教育の基本的原則、無償の義務教育は撤回されることになつた。

無償の義務教育の撤回、それは世界で初めて誕生した社会主義国ソビエトにとつてたとえような屈辱であつたろう。この無償の義務教育の撤回という事態に対して、ソビエトが取つた政策は、1922年に設立されたばかりのピオネール組織の利用であつた。すなわち、ピオネール組織はレーニンの教えを将来のソビエトの建設者となる若い少年少女に伝え、さらに、ソビエト国民としての自覚を持たせることである。このピオネール組織は教育省管理下にある学校制度とまったく別の組織であり、その指導はソビエト共産党の下にあるが、ロシア革命後ソビエト政権が立てた無償義務教育制度が国家財政上の問題で、その実施が不可能となつた今、ソビエトの将来を担う子どもたちを集め、教育を施すことができるのはピオネール組織を除いてほかになかつた。その結果、ピオネール組織はレーニンの妻クループスカヤらの教育学者の後援を受けるとともに、共産党による強力な子どもたちの加入運動が進められた。すでに、1922年にピオネールの少年少女の活動の場としてモスクワに開設されていたピオネールの家は、レーニンの教えを子どもたちに伝える思想教育の場としての一面と子どもたちの義務教育

を補う知的活動の場としての面を合せ持つことになつたと考える。現在、ピオネール組織はピオネールの家、あるいはピオネール宮殿と呼ばれる総合施設を持ち、それらは芸術活動、スポーツ、文学、歴史、数学、科学などの種々な分野のサークルを設け、子どもたちの関心に応じて、自由に参加し、その知的欲求を満足させる場を提供している。さらに、少年自然観察ステーション、少年技術者ステーションなどより高度な知識をピオネールの子どもたちに教える専門分野別の活動拠点を設置し、そこには労働組合から派遣された熟練労働者や科学者、あるいは大学、研究所から教員が派遣され、子どもたちの指導を行っている。このような教育機関としてのピオネール組織の役割が1922年の教育政策の失敗が原因となつて、新たに備わつたと考えられよう。

無償義務教育が実施されない以上、ソビエトの子どもたちの多くは義務教育を受ける機会を奪われてしまった。しかし、教育省の義務教育学校にかわつて、無償の教育がピオネール組織で実施されることになり、ピオネール組織への国民の関心と理解は急送に高まつたと考える。それは1922年のピオネール組織創設時に、ピオネール隊員はわずか約4千人であつたのが、翌1923年には7万5千人に急増したことを見ても裏付けられよう。1924年、レーニンの死去によって、ピオネール組織はその名称をレーニン記念全ソ連邦ピオネール組織と改めた。1926年11月12日子ども技術研究所が設立された。これはピオネール組織の教育機関としての役割が一層高まつたために、ピオネールの課外教育施設での技術教育の指導法を研究するために設立された施設であつた。この年ピオネール隊員は182万人と激増している。当時も、子どもたちのピオネール組織への加入は法的な強制力を持つものではなく、子どもたちの自由意思にもとずいての加入がなされていたことを考えても、ピオネール組織の教育機関としての役割が子どもたちのピオネール組織への加入の意欲を高める一因となつたと考える。

この後、1930年ソ連邦閣僚会議において無償義務教育制度の実施が決定された後、義務教育学校は教育省の定めた義務教育カリキュラムのみを教える場となり、ピオネール組織は子どもたちの興味と関心のある分野の活動のみを教える場とその役割は明確に分けられ、ピオネール組織の教育機関としての役割は、教育省の管理下の義務教育制度と互いに、その役割を補い合うシステムへと発展していった。1962

年にはピオネール組織は創設40周年記念を祝して、レーニン勲章が授与された。1980年創設60周年記念を迎えたピオネール組織は1985年には全ソ連邦に2千万人の隊員をかかえる巨大な組織へと成長した。

このようにソビエトのピオネール組織が共産党の思想教育機関としての役割のほかに、教育省管理下にある義務教育機関を補う役割を革命直後の教育政策の失敗の結果担うことになったことがピオネール組織が短期間に成長した要因の1つとなったと考えられよう。

2) ピオネールキャンプ

ピオネールの活動の場にはピオネールの家、ピオネール宮殿、ピオネールキャンプ、少年自然研究者ステーション、少年技術者ステーション、旅行ツーリストステーション、児童音楽芸術学校等がある。いずれもピオネール隊員である少年少女の自主的な関心によってその活動が選択できるように、それぞれの施設には種々なサークル活動が用意されている。これらの施設の運営と管理は労働組合の支援と協力によって行われている。これらの種々なピオネール活動の中でもピオネールキャンプは特に重視されている。次に、ソビエトにおいてピオネールキャンプが重視される要因について、考察を加えて行きたい。

ロシア人の生活観、価値観、人生観を考える時、ロシアの自然を無視することはできない。ロシア人の生活にとって自然の及ぼしてきた影響力は我々日本人にとって想像を絶するものがある。

ロシアの四季の変化は日本の四季の移り変りのように、おだやかな情緒のあるものではない。1年の内、10月から4月まで続く長く厳しい冬は日本のそれとは違い、ロシア人の生活すべてに厳しい制約を与える。ロシアの冬は10月のある日、突然到来し、ロシア人の生活のすべての環境を一変してしまう。気温はある日突然マイナス30度へと劇的に下がり、日の出は午前9時、日の入りは午後4時と日中の活動時間は大幅に制限される。一方、ロシアの春は4月突然到来する。またたく間に春はロシアの町を席卷し、冬を追い出す。10日もしない内に町の中から冬は消え、木々のこずえに若葉が吹き、町中の公園には春の花々がいっせいに咲きほころぶ、日本のようにおだやかな四季の移り変りの中で生活する我々日本人にとって四季の変化は楽しみなものである。その意味で日本人は自然とともに生きていると言える。しかし、ロシ

ア人にとって四季の変化とは自然界の巨大なエネルギーの下に人間が置かれることであり、その意味でロシア人は自然に支配されていると言える。このような自然の支配の下に生きるロシア人にとって自然とは支配者であり、その下では人間がいかにか小さな存在であるかをロシア人は幾世代にも渡つて学び、さらに、それはロシア人の国民性に大きな影響を及ぼしたのである。

このようなロシアの自然といつた観点から「ロシア人の日常生活をみていると、教育や体制などいつたレベルでは説明できない性格が浮びあがってくる。驚くほどの忍耐力、度はずれの親切心と客好き、どうにもならないほどの自己主張、劣等感と貴族趣味などが目につく、これはみなきびしい自然のなかで生きなければならぬ人間の知恵やヨーロッパの文化から遠くへだてられた国の歴史が長い年月をかけて生み出したものだろう」(2)と思われる。いずれにせよ自然がいかにか人間の生活や性格に影響を与えてきたかが察知できよう。しかし、この反面、いかにか人間の生活と性格に自然が大きな影響力を及ぼすかを知っているのはロシア人自身ではあるまいか。ロシア人は春の到来と同時に、それまで家に閉込もつていた生活から、いっせいに屋外へと出る。若若男女問わず、人々はからだいっぱい日光を浴びようとする。野山へと木々のこずえから青々とした若葉の吹き出るさまを見に出かける。ロシア人はからだで春が来たことを感じとつているのだろう。幼い子どもをつれ、森林へ木のこを取りに多くのロシア人が出かける。これは帝政ロシア時代からのロシア人の数少ない楽しみの一つであった。ロシア人にとって、古来野外活動の意義とは、春となり、厳しい冬の猛威が去っているつかの間に、やさしい自然のふところに入り込み、身を委ねることによつて、自然の恩を身心で受け取ることなのであろう。ロシア人は長く厳しい冬を生き、そして、それを迎える術としての野外活動の大切さを身をもつて代々受け継いできたのではあるまいか。

1917年のロシア革命の後、帝政ロシアの支配から開放されたロシア国民の生活観と自然観はその後のソビエト政権の教育政策へも強く反映したと思われる。1920年代の教育政策の失敗によって打ち出されたピオネールの教育組織としての役割は共産主義の思想教育との一体化へと進み、それは労働を通しての教育へと発展したと考える。1920年から1950年代のソビエト国家建設期の資金、物資、さらに

人材の極度に不足した時代にピオネール組織が教育の場として見出したのは、正に、ロシアの大自然に子どもたちの身を委ねさせ、その豊かな自然の中で子どもたちの模範となるべき若い青年労働者の指導の下に、子どもたちに共同生活の場を与え、自主的な労働活動を通し、将来のソビエトを担う子どもたちに必要とされる社会主義的な思想性と社会生活の原則を教えることであつたのだろう。それは精神的にも、身体的にも成熟した模範的な青年男女の労働者をピオネール隊長として採用し、教科書の上で子どもたちが知っている知識としての模範的なソビエト国民像に対して、自然の中で優秀な労働者であり、現実的にソビエトを担っている青年と労働を通してふれあい、共同生活を営むことによつて、少年少女と青年労働者との心に血のかよった交流をもたせようとしている。ピオネールキャンプでの子どもたちの活動と行事は当初の労働活動中心から、子どもたちの関心と興味によつて選択できるように種々な分野の活動が用意されるようになった。各分野ごとに専門家が労働組合から派遣され、ピオネールキャンプは子どもたちにとって、より自主的な活動を営むことができる場へと改善されていった。一方、このピオネールキャンプは実際にソビエトの社会を建設している労働者大衆が労働組合を通じて直接子どもたちとふれあい、彼らが理想とする人間を育てることができる場を提供することになった。この意味でピオネールキャンプは大人と子どもたちとの意思疎通、交流の場として重要な役割を果たすことになったと考える。

ピオネール組織の活動は財政難のソビエト政権の手から労働組合の手に移され、ピオネール活動に必要な物資と人材はすべて労働組合の援助によつて提供され、その後ピオネールキャンプの組織は労働組合が地域の教育施設、文化・身体活動の施設を全面的に援助するシエフ(後援団体)制度となつて確立し、現在にいたつた。

このようにロシア人の伝統的な野外活動と共産主義の思想教育活動とがピオネールキャンプとして合体し、広く国民の支持を受けることができたが故に、労働組合は毎年、多額の資金と人材をピオネール組織に投資してきた結果、ピオネールキャンプをはじめとする多くのピオネールの施設がソビエト全土に普及したと推測できよう。

3. まとめ

1922年、わずか4千人から始まったピオネール組織は創設後64年を経た今日、隊員数

は2千万人に達し、ソビエトの少年少女のほとんどすべてをその組織に抱えることになった。正に、ピオネールはロシア革命以来70年をかけてソビエトが作り上げた巨大な少年少女の組織と言えよう。

このピオネール組織のソビエト社会に果たす役割、さらにはその活動の1つピオネールキャンプの目的について、従来共産主義思想の教育組織としての1面が強調して説かれてきた。しかし、本研究は従来からの思想教育の角度からの考察のほかに、ソビエトの教育史、文化史、経済史の角度からピオネール組織の発展の歴史を見なおした結果、従来からの思想教育としてのピオネール組織の解釈の外に義務教育を補助せざるおえない立場にあつた歴史的必然性がピオネール組織の急激な発達の一因としてとらえることができるとの仮説を得た。さらに、義務教育の代用的役割を果たすピオネール組織の活動の指導を経済的破綻の縁にあつたソビエト政権から、労働組合が請負った結果、ロシア人の文化的、思想的基盤であるロシア人の自然観がピオネール組織の活動に強く影響を与え、それがピオネールキャンプという大自然の中での労働活動を通しての思想教育というソビエト独自のキャンプ活動の形態をとつた思想教育のシステムが生まれたとの仮説に至つた。

本研究はソビエトのピオネール組織の活動の1つピオネールキャンプについて、その成立過程を中心に仮説を立てるにとどまったが、今後ソビエトの青少年の課外活動とそれを支える社会制度を明らかにするため、さらに研究を進め、ソビエトのレクリエーション活動の究明に努めていきたい。

引用文献

- (1) 梅根 悟監修、世界教育史大系「ロシア・ソビエト教育史Ⅱ」、講談社、昭和53年。 P367
- (2) 川野辺 敏著、「白樺のなかの子どもたち」、大月書店、昭和58年。 P13

参考文献

- 1) 梅根 悟監修、世界教育史大系「ロシア・ソビエト教育史Ⅱ」、講談社、昭和53年。
- 2) 川野辺 敏著、「白樺のなかの子どもたち」、大月書店、昭和58年。
- 3) 大柴 衛、海老原 達訳、「ソビエトの学校」、明治図書出版、昭和51年。